

REPORT

令和5年度 おかやま文化芸術アソシエイツ事業報告書



公益社団法人 岡山県文化連盟

おかやま
文化芸術アソシエイツ

おかやま文化芸術アソシエイツ

岡山県文化連盟が持つ既存のネットワークを生かして、私たち自身が生活するその地域の文化を構成する人や資源、歴史についてよく知り、地域の未来を見据えた新しい価値の創造と多様な主体の共生に寄与するための取り組みを続けています。

おかやま文化芸術アソシエイツの機能

1 中間支援機能

文化団体等の活動に対する相談対応、助言、伴走支援、パイロット事業、文化活動に係る研究会、勉強会、講演会などの実施

2 シンクタンク機能(調査分析) ・ 政策提言

県内の文化芸術資源を発掘、再評価、活用するための調査事業の実施

3 助成金の分配

県民文化祭を通じた助成、県や助成財団の助成金審査など

実施体制

主催 おかやま文化芸術アソシエイツ(公益社団法人岡山県文化連盟)・岡山県

プログラム・コーディネーター(非常勤) 金孝妍

アドバイザー(非常勤) 朝倉由希、斎藤 努、杉浦幹男、森山知己

エグゼクティブ・アドバイザー(非常勤) 大月ヒロ子

WEB・システム担当 株式会社 LogooDesign

プログラム・オフィサー(常勤、文化連盟主任 兼務) 高田佳奈

記録・アーカイブ担当 合同会社生活と表現

文化連盟事務局長 兼務(常勤) 中西 健

映像・編集担当 ざっばうさぎ

文化連盟主任 兼務(常勤) 剣持宏子



金孝妍(キム・ヒョヨン)

アーティスト

1980 韓国済州島生まれ/2001 École Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris, France 交換留学
2003 弘益大学校美術大学 絵画科 卒業(韓国・ソウル) / 2005 弘益大学校一般大学院 絵画科修士 修了(韓国・ソウル)
2018 倉敷芸術科学大学大学院 芸術研究科 芸術制作表現専攻博士課程 修了 / 岡山市在住
<主な賞歴>2016 第2回 石本正日本画大賞展 奨励賞受賞 / 2017 岡山県新進美術家育成I氏賞 奨励賞

事業内容

助成事業

おかやま県民文化祭共催 文化パワーアップアクション助成事業

文化・芸術を生かした地域的・社会的課題への対応を通じ、新たな価値の創造を目指す事業に助成しています。(ジュニア育成支援事業、文化団体育成強化事業、地域文化創造支援事業)

マイニングおかやま 活用実践モデル事業助成

おかやま文化芸術活動相談窓口寄せられた相談の中から、公益性が高く文化芸術の社会的価値を具現化するに相応しい事業をモデル事業として採択し助成しています。

制作事業

文化芸術交流実験室

文化・芸術と他分野との連携による新たな取り組みの提案と、ソーシャルインクルージョンの視点に基づくレクチャーとワークショップを定期的に開催。県内の人材や文化資源の領域横断を誘発する出会いの場の創出とネットワーク構築を目指しています。

訪問実験室! 文化芸術が生まれてくる現場

公式 YouTube チャンネル「OKAYAMA CULTURE V」で公開。文化芸術が日々生み出される場所と、そこで創作や生活をしている表現者に会いに出かけ、日頃私たちが足を踏み入れることのないプライベートな現場をレポートしています。

おかやま県民文化祭 これがOKAYAMA! プログラム

おかやま県民文化祭の象徴的事業として、毎年地域(備前、備中、美作)とテーマを変えながら実施。地域の文化芸術資源を活用し展開する事業や、新たな価値を発見し楽しみ方を提案する事業を企画運営しています。

調査研究事業

ヒト・コト・場所

県内の文化芸術資源を発掘、再評価、活用するための調査研究。県内のちょっと気になるヒト・コト・場所取材して、WEB や冊子で紹介しています。

公式 YouTube 「OKAYAMA CULTURE V」

おかやまの文化芸術の“楽しい”を紹介する映像コンテンツのプラットフォーム。アソシエイツで作成する様々な映像コンテンツのほか、県内で活躍する多様な主体の文化芸術活動の様子を随時公開しています。

マイニングおかやま

岡山県を拠点に活動するアーティストを地域の貴重な文化資源として可視化し、アーティスト活動の活性化に繋げていただくための WEB プラットフォームを運営しています。

その他の事業

アートマネジメント研修

地域の文化芸術を支える側の人材育成を目的として実施。文化関係公益法人や文化施設等の職員を対象とした情報交換会(右記参照)に付随した取り組みです。

おかやま文化芸術活動相談窓口

文化芸術活動を行う個人、団体を対象とした専門の相談窓口。電話、FAX、メール、問合せフォームで受付しています。

他機関との連携

<行政機関等>

NPO 活動官民合同資金調達説明会&相談会
行政、福祉、共同募金、NPO センター、コミュニティ財団など、官民合同、分野横断で年間3回程度実施しています。

岡山県障害者文化芸術活動支援センターの専門家ネットワーク

岡山県障害福祉課が設置する障害者文化芸術活動支援センターの協力専門機関としてネットワークに参加。障害者アートポータルサイトに障害のある人の文化芸術活動に関する相談先として掲載しています。

<公益財団等>

県内文化関係公益法人等情報交換会

地域の文化力の向上を目的として、文化関係公益法人や文化施設等の職員による情報交換会を年2回実施しています。

情報発信

- <https://o-bunren.jp/associates/>
- Facebook
<https://www.facebook.com/o.bun.ren/>
- YouTube
OKAYAMA CULTURE V
- X (旧 Twitter)
@o_bunren
- Instagram
@okayamabunka

発行物

- おかやま文化芸術アソシエイツ事業報告書
- おかやま県民文化祭 これがOKAYAMA! プログラム冊子

美食地質学：この地域の食はなぜ美味しいのか

日時：2023年9月24日（日）11:30～16:00

開催地：渚の交番 ひなせうみらボ（備前市日生町日生3518-5）

講師：巽 好幸（ジオリブ研究所 所長／マグマ学者／理学博士）

岡嶋隆司（考古学・食文化史研究者／料理人）

私たちが住む岡山県は、恵まれた気候と繋がるように美味しい果物や食材がよく知られています。今回は瀬戸内の多島海と山が連なる豊かな環境と食の関係を、地球の中身から探る機会を設けました。講師は美食地質学の創始者である巽（たつみ）好幸さんと、古典料理研究家であり犬島の貝塚調査・保護活動にも携わる岡嶋隆司さん。瀬戸内海を望む日生・頭島で、岡山県の地域的な特徴と食の関係を地質学的、食文化史的な視点から紐解いてみました。

巽 好幸…1954年大阪生まれ。理学博士（東京大学）。京都大学総合人間学部教授、同大学院理学研究科教授、東京大学海洋研究所教授、海洋研究開発機構プログラムディレクターなどを務める。水惑星地球の進化や超巨大噴火のメカニズムを「マグマ学」の視点で考えている。一般向け著書として『富士山大噴火と阿蘇山大爆発』（幻冬舎新書）など。

岡嶋隆司…考古学と食文化史を研究。犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム事務局長・日本考古学協会会員・日本古典料理研究・料理人。古典料理書や古献立、遺跡から出土する食物残渣から当時の食文化を研究している。「郷土料理」『大学的岡山ガイドーこだわりの歩き方』岡山大学文明動態学研究所編（昭和堂2023年）など寄稿。



レポート

会場は日生諸島の頭島（かしらじま）にある「ひなせうみらボ」。豊かな海を次世代につなぐための活動拠点であり、穏やかな海景を一望できるスポットです。今回は地域活動に携わる方や食に興味を持つ方など、10名ほどの参加者が集まりました。

まずは考古学・食文化を研究する岡嶋さんから、岡山の食材や郷土料理の歴史、文化についてのお話がありました。岡嶋さんは、昔の文獻から江戸時代に寿司やサワラの刺身が食べられていた史実を紹介。また、ママカリの名前の由来「まま（飯）を借りるほど美味しい」という伝承について、水揚げ量が多い10月が稲刈り時期であることから「飯を借る・稲を刈る」の2つの意味が結び付くことを推察。身近な食材を題材に、食文化の歴史を紐解くことの面白さを伝えました。

続いて世界的な地質学者の巽さんが、美食地質学に基づいた瀬戸内の自然と食の関わりについて紹介しました。「なぜ瀬戸内海の魚が美味しいのか」を解明するため、瀬戸内海がいつ頃のように成り立ったのかを解説。島の密度が高い瀬戸内海は、地殻変動により瀬戸（隆起域）と灘（沈降域）が巨大なシワとなって繰り返す特徴的な地形です。潮流の速さや温暖な気候、さらに河川によって周辺の山地から森の栄養分が流入することで、生態系の豊かな内海となっているのが特徴。「自然の恵み」という曖昧な言葉ではなく、地質的な特徴から種類が豊富で美味しい魚が獲れる理由が理解でき、参加者も興味深く耳を傾けました。

昼食後は、全員で「ひなせうみらボ」の周辺を散策。多島美を眺めながら、周辺の島々の成り立ちや地球環境についてお聞きしました。次に、犬島貝塚の調査を行う岡嶋さんによる貝塚の一部から貝や土器の破片を掘り出すワークショップを開催。参加者は古代ロマンに想いを馳せつつ、発掘という貴重な機会を楽しみました。

最後は講師2名のトークセッションと質問タイム。四国の食文化や酒処と呼ばれる地域の特徴、気になる地震についての話、未来の食はどうなるのか、といった質問に応えながら、地質学と食についての話題を広げました。



参加者からの質問に答える岡嶋さん(左)と巽さん(右)



頭島の美しい風景を眺めながら周辺を散策



貝塚の発掘体験。土器や貝の破片を発見!

キーワード



渚の交番 ひなせうみラボ

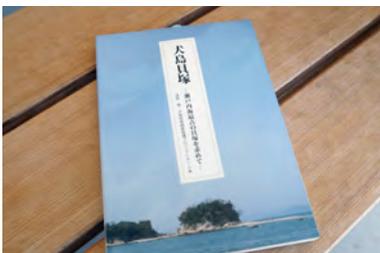
2021年9月、備前市・日生諸島の頭島（かしらじま）にオープンした海洋施設。日本財団が推進する「渚の交番プロジェクト」の取り組みとして、豊かな海を次世代につなぐための活動拠点となっている。実験室を行った1階の多目的ルームは、「海との共生」をテーマにした海洋教育や、海への興味を深める海洋体験、アマモ場の再生活動・研究、環境活動などに幅広く利用されている。館内には土産・海産物を販売する物販コーナーもあり、周辺は瀬戸内海を一望できる絶景スポットとなっている。

<https://hinase-umilab.com/>



美食地質学

巽好幸さんが提唱する「美食地質学」とは、日本の食文化と変動帯である日本列島の密接な関係を紐解く学問。地球変動の影響による地形・地質の成り立ちや特徴といった「地質学」の観点から、多様な食材が各地域に存在する理由、そこから生まれた和食や郷土料理などの食文化を掘り下げていくもの（『美食地質学入門』光文社新書）。地域ごとの食文化や美味しさの背景にある地質学的な意味を理解することで、地域創生やツーリズム、更には文化や信仰など日本人の価値感をめぐるテーマに広げ、未来を考えることにつなげている。所長を務める「ジオライブ研究所」のサイトでコンテンツを紹介。<https://geo-live.jp/library/>



犬島貝塚

ワークショップのテーマとなった犬島貝塚は、岡山市東区犬島の地竹ノ子島にある縄文時代早期の貝塚で、1979年に発見された。押し型文土器や無文土器の2種類の土器や、ヤマトシジミなどの貝が見つかった。近年は台風の影響により崩落が危ぶまれていたことから「犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム」を発足。岡嶋さんは事務局長を務める。写真は同チームが編集した研究・講演の記録集『犬島貝塚―瀬戸内海最古の貝塚を求めて―』（六一書房）。

ワークショップ

ランチ

備前市日生町のカフェ「コハク」の特製弁当とお味噌汁。岡山市の米農家から仕入れた在来種の朝日米、自家製野菜、旬の食材など、瀬戸内の恵みがたっぷり詰まった手作りメニューが盛りだくさん。参加者からも好評でした。



プログラム

11:30～ 「ひなせうみラボ」集合・全体説明

11:35～ 岡嶋さんの講義

・郷土食の歴史や岡山の農業・漁業と食文化の関係

12:00～ 巽さんの講義

・美食地質学、岡山の地質、瀬戸内の魚の美味しさ

12:40～ 昼食タイム

13:30～ 周辺を散策

・多島美を眺めながら、自由なトークタイム

14:15～ ワークショップ

・釘などを使い、貝塚から土器の破片や貝殻を掘ってみる

15:00～ トークセッション

・質問コーナー

・本日の感想

終了・解散



参加者コメント

- ・食文化や地質学について、表面的な部分だけではなく深掘りした内容を知ることができました。自身の地域活動のヒントにしていきたいです。(30代/女性)
- ・食は大事なので、地域の食材や旬のものをムダなく料理して食べたいと思いました。(50代/女性)
- ・リアルプラタモリだと感じました。自分の住んでいる地域のことなので、より関心が強かったです。(30代/男性/自由業)
- ・進行のメリハリや気づき、参加者同士のオープンな雰囲気もう少し欲しかったです。(40代/女性/自営業)

講師コメント

島というロケーションも含めて、全体的にゆったり、のんびりとした雰囲気の間だったと思います。今日のお話や質問を通して、皆さんそれぞれが岡山とは一体何なのかということを探されているのを感じました。美食地質学は単にグルメの学問ではなく、地球科学としての背景があります。今回は魚という恵みだけではなく、地震や環境についても触れました。自然に感謝して魚をいただき、畏敬の念を持って地震に備える。私たちの日常に結びついた学問として、日々の生活に活かしていれば幸いです。(巽)

「ひなせうみラボ」は初訪問でしたが、立ち寄りやすくて良い場所だと思います。参加者のみなさんが興味を持って聞いてくださいました。特に、お子さんから積極的に質問が来たことがうれしかったですね。確実なことが言えないのが考古学や食文化史の難しいところですが、切り口や見方を変えて、様々な可能性を探っていく点に魅力があります。地球、そして人の歴史と食文化を通じて、未知の世界の面白さを感じてみてください。(岡嶋)

文化芸術交流実験室44

溶け合う異文化： 自然の一部として『個』を考える

日時:2023年10月8日(日)12:00~16:00

開催地:岡山市立 犬島自然の家(岡山市東区犬島119-1)

講師:今福龍太(文化人類学者/批評家)

岩本象一(音楽家)

文化は自然環境と人間の営みが混ざり合い、様々なバリエーションをもち生まれます。全世界的に自然や生態系のあり方を問い直している今、身近に触れる自然との調和について考えてみてはいかがでしょうか。今回は『クレオール主義』の著者で、長年にわたり異文化について考えてこられた今福さんと、ガムラン奏者でもある岩本さんを講師に招き、音楽から見た溶け合う異文化についてお聞きし、自然や音と交わるワークショップを開催しました。

今福龍太…文化人類学者・批評家。1955年東京生まれ、湘南育ち。1980年代初頭からメキシコ、カリブ海、アメリカ南西部などに滞在し、調査研究に従事。国内外の大学で教鞭を取りつつ、2002年より奄美・沖縄・台湾を結ぶ群島に学び舎を求めて「奄美自由大学」を創設・主宰。主著に『クレオール主義』『群島—世界論』など。

岩本象一…1981年生まれ、神戸出身。2005～2008年にインドネシア政府奨学金を得てインドネシア国立芸術大学ジョグジャカルタ校に約3年留学し、ガムラン演奏や舞踊を習う。帰国後は神戸のジャワガムラングループ代表を経て岡山に移住。2010年より奉還町にてガムラン教室を開講。インドネシア語通訳や翻訳も行う。



レポート

今回は自然とアートが調和した犬島を会場に、音楽・民族学的なアプローチから「溶け合う異文化」について考える実験室を開催しました。

まずは昼食をとり、親睦を深めたところで今福さんによる講義を開始。今福さんは20代の頃に衝撃を受けたクレオール（混血）文化に触れつつ、古代から続く自然環境と人間の相互関係について話しました。自然界のエレメントから「風」をテーマに取り上げ、風を表現した文学や芸術、自然の中に存在する音楽を紹介。思想家ヘンリー・ソローの「すべての音は沈黙とほとんど同じ泉から湧き出る」という言葉や、風で奏でる「エオリアン・ハーブ」や凧といった風の鳴りを音として表現する文化について解説しました。後半は奄美や沖縄の島唄を映像や三線の演奏で紹介し、自然現象、人の暮らしや想いと密接に関わる民謡・歌遊びの魅力を伝えました。

次はガムラン奏者として活躍する岩本さんがインドネシアの風土やジャワ島ガムランの特徴を紹介。「シトゥル」と呼ばれる弦楽器や太鼓の演奏を披露しました。主に打楽器を奏でるガムランの特徴について、「すぐに音が出せて誰もが参加できる」と語る岩本さん。参加者は輪になって集まり、岩本さんが奏でるエキゾチックな音色に耳を澄ませます。社会構造や信仰、風習、内面性といったガムラン音楽の背景にも視点を向けつつ、心に響く音楽体験を楽しみました。

後半は岩本さんが持参した世界の様々な笛を参加者たちが吹き、音の一部になってみるというワークショップ。当日はあいにくの雨でしたが、屋根下で参加者全員との即興演奏を試みます。「誰も音を出していない時に鳴らす」「動きながら鳴らす」「5回鳴らす」などのパターンを設けながら、全員で音を重ね合わせます。音に集中するほど感覚が研ぎ澄まされ、静寂の中に鳥の鳴き声や雨音が浮かびます。講師の2人も持参した楽器を演奏。全員で即興のメロディを奏でながら、島の音も含めた自由なセッションを楽しみました。

最後は講義で挙がった「沈黙からの音」というキーワードをもとに、岩本さんが手話の歌を紹介。講師の2人を中心に感想を述べあいました。



風にまつわる音や島唄について語る今福さん



岩本さんによるガムランの生演奏



笛を鳴らして即興演奏を体験してみる

キーワード



岡山市立 犬島自然の家

岡山市東区宝伝の沖合に浮かぶ「犬島」は、周囲4kmほどの広さをもつ岡山市唯一の有人島。豊かな自然が残り、近年では「犬島精錬所美術館」や集落で展開されるアート作品でも注目を集めている。今回の会場となった「犬島自然の家」は、旧犬島学園の跡地を改装した社会教育施設。自然や文化の体験学習や活動ができ、宿泊室や浴室、厨房、研修室などを備えている。

<https://www.city.okayama.jp/shisei/0000003248.html/>



クレオール主義

クレオールは植民地で生まれ育った人間を指す言葉で、さまざまな混血の民やその言語、文化も含めた意味を持つ用語。今福さんはメキシコやカリブ海、ブラジルなどをフィールドに活動する中で、異文化の混合や流動性から成る音楽などの多様な文化、創造性について「クレオール主義」として提唱し、自著にもまとめている。講義では、クレオール文化や自然と一体化した音の表現について解説した。

※書影は『クレオール主義』の初版（左）と文庫版（右）



ガムラン

インドネシア各地で行われている金属の打楽器群を中心とした伝統音楽で、演奏する楽器や楽曲も含めた総称。ジャワ島・バリ島を中心として、地域ごとに様々なスタイルを持つ。2021年にはユネスコ世界無形文化遺産に指定されている。講師の岩本さんはジャワ島中部のガムランを演奏。主に太鼓や鉄琴などの金属系打楽器や、琴型弦楽器などを演奏する。

ワークショップ

ランチ

昼食は犬島でカフェを営む池田 栄さんの手作り弁当。山菜おこわや魚・野菜を使った優しい味のおかずは、まさに島のおふくろの味。「犬島自然の家」の教室内でいただいた。



プログラム

12:00～ 定期船で犬島へ到着後、会場に集合

・ランチタイム

13:00～ 今福さんのトーク

- ・クレオール文化について
- ・自然と人の関係性(テーマ: 風)
- ・奄美地方に伝わる島唄の文化

14:35～ 岩本さんのトーク&演奏

- ・インドネシア、ジャワ島ガムランを解説
- ・岩本さんによる生演奏

15:20～ ワークショップ

- ・岩本さんが持参した笛を1本ずつ選ぶ
- ・屋外に移動。全員で笛を鳴らしてみる

16:00～ 感想&質問タイム

終了・解散



参加者コメント

- ・音楽や教育は統制・管理されてしまう現実があるけれど、すでにそこにあるものなんだと感じました。音を出している自然と自分が地続きにあって、「自然の中に人間もいるんだな」と腑に落ちる感覚がありました。場の力と企画の力、皆さんの考えやスタイルが溶け合って、とても刺激的でした。奄美の唄には涙が出そうになりました。(40代/女性/自営業)
- ・インドネシアの変わった管楽器を扱って楽しかったです。(10代/男子/学生)
- ・各講師のレクチャーとみんなで参加したワークショップとで、全体のバランスが良かったと感じます。犬島という場所に來られたことも良かったです。(30代/女性/会社員)

講師コメント

今日は島の景色と空気に包まれながら良い時間を過ごせました。特に最後のワークショップは素晴らしい体験で、もっと参加者の皆さんと交流したり、岩本さんとセッションしたりする時間が欲しかったな、というのが正直な思いです。今日は奄美の島唄や三線について紹介しましたが、皆さんの生活の中にも即興的な側面があると思います。ルーティンだけの暮らしではなく、もっと自由な遊び心を持って、生きる中での瞬間一つひとつを楽しんでほしいです。(今福)

今回は、写真やスライドを使わず講義を行い、楽器演奏やトークといった耳から入る情報だけに絞り、参加者達の想像力の余地を残せるように試みました。ワークショップに関してはどこで行うかがとても重要だったので、直前までの読めない空模様になや振り回され、内容の組み立てに苦労しました。晴れていれば島の散策や音の採集も楽しめたかったです。事前に今福さんの著書を読んで感銘を受け、自分の好きな音楽や文化との繋がりを感しました。素敵な出会いの機会をいただき感謝しています。(岩本)

日本語には「カリカリ」「ごろごろ」といった擬音語、「ぴよんぴよん」「くるくる」などの擬態語など、心揺さぶる表現の美しいことばがあります。今回は川瀬 慈さんとハブヒロシさんを講師に迎え、言葉と音に関する活動経験をもとに、異文化の出会いやそこで見た母国の言葉の形についてお話をいただきました。言葉が詩になり音楽となる即興的な楽しみ方や、言葉について考える時間を持つことで、新たな世界が見えてくるかもしれません。

川瀬 慈…1977年岐阜県生まれ。映像人類学者。国立民族学博物館准教授。エチオピアの吟遊詩人の研究に基づき、詩・小説・映像作品・パフォーマンス等、既存の学問の枠組みにとられない創作活動を行う。主著に『ストリートの精霊たち』(鉄犬ヘテロピア文学賞)、『エチオピア高原の吟遊詩人うたに生きる者たち』など。

ハブヒロシ…アーティスト。NPO法人丹田呼吸法普及会理事長、京都大学大学院医学研究科特定研究員、医学博士。ガムランやサバールドラム修行、馬喰町バンド、レコーディングなど、音楽をはじめ様々なジャンルで活動。地域おこし協力隊として高梁市へ徒歩移住。2022年に社会疫学研究のため渡米。芸能の現在性、出会いと対話のプロセスを形にし、ある主の詩・沈黙の瞬間に触れるようなコミュニティーを巡るアートプロジェクトに邁進。



レポート

今回は「ことばと音」をテーマに、双方の未分化的な関係性について考える実験室を開催しました。会場は、瀬戸内市の国立療養所「長島愛生園」の中にある「喫茶さざなみハウス」。窓からはきらめく瀬戸内海の景色が一望でき、長島の穏やかな空気感が会場を包みます。参加者は思い思いに会話を弾ませるなど、開始前からリラックスムードが漂う回となりました。

まずは川瀬さんが、言葉と音楽が交わる異文化を映像と共に紹介。川瀬さんが調査するエチオピアの吟遊詩人「ラリベラ」は、家の前で家人にまつわる歌や演奏などを行って報酬を受け取り、集団で旅をしながら音楽で生計を立てています。ラリベラが歌い続ける背景には「ハンセン病の恐怖から逃れるため」といった諸説があり、スピリチュアルな伝承者としての側面も持っています。次に紹介した楽師「アズマリ」は、権力者と庶民の言葉を歌で仲介するマスコミ的な役割を担っています。映像では、アズマリが酒場の客と即興歌の掛け合いを楽しむ様子が映し出され、川瀬さんは「人々の心情を代弁する言葉の職人である」と解説。吟遊詩人について、「音楽と語りの未分化の魅力を持っている」と話しました。

後半は昼食を挟み、ハブヒロシさんのトークへとつなぎます。ハブさんは自己紹介を兼ねて、ハマっている丹田呼吸法を参加者にレクチャー。深い呼吸で頭をスッキリ整えたところで、多彩な肩書から公衆衛生学や音楽活動について話題を膨らませます。ハブさんは音というテーマからオリジナルの打楽器「遊鼓」を紹介し、叩きながら歩いて高梁市に移住したというエピソードを披露。参加者はハブさんのユニークな世界観に引き込まれました。

好きな言葉や詩を披露するコーナーでは、参加者から長島愛生園と縁の深い詩人・志樹逸馬(しきいつま)や茨木の子の詩、絵本の一節などが紹介され、言葉や朗読の魅力について語り合いました。続いて、手足や声を使って音を合わせるワークショップに挑戦。声を出すことで心が開放されていくのを実感でき、難しいながらも楽しい時間となりました。音で遊んだ後は、川瀬さんとハブさんのトークセッションで締めくくりました。



講師のハブさん(左)と川瀬さん(右)



川瀬さんがエチオピアの吟遊詩人について紹介



丹田呼吸法をレクチャーするハブさん

キーワード



長島

今回の開催地である長島は、瀬戸内市の日生諸島に属する周囲 16km の島。1930 年に日本初のハンセン病国立療養所「長島愛生園」が開設され、平成初期までハンセン病患者の隔離政策が行われた。島内には療養所の建物や史跡、資料が残されており、差別に苦しんだ入所者の生きた証とその歴史を今に伝え、あらゆる差別・偏見の解消につなげるための取り組みが行われている。

島の総合案内所には今回の会場となった「喫茶さざなみハウス」があり、展示資料や書籍、文芸作品を通じてハンセン病問題に触れる機会を作り、気軽に来られる憩いの場として、食事やお茶を楽しむことができる。

<https://sazanami-house.info/>



詩人・志樹逸馬（しきいつま）詩集

好きな詩や言葉について語り合うコーナーの中では、参加者の一人から詩人・志樹逸馬の詩が紹介された。13 歳でハンセン病を発病した志樹逸馬は、東京の療養所から長島愛生園に移り、養鶏仕事のかたわらで 17 歳から詩作をはじめた。43 歳で亡くなるまで創作を続け、生と死を見つめた詩の数々を発表。ノート 60 冊分の遺稿を残した。写真は『新編 志樹逸馬』(左)と、『島の四季 志樹逸馬詩集』(右)で、「喫茶さざなみハウス」にも蔵書がある。

ワークショップ

ランチ

昼食は「喫茶さざなみハウス」のお弁当。島採れの梅や昆布の佃煮入りのおにぎりと、地元農家が育てたサツマイモなどの野菜のおかずが中心。マクロビオティックをベースにした体に優しいメニューが評判だった。



プログラム

11:00～ 長島「さざなみハウス」集合

- ・川瀬さんのトーク・映像紹介
エチオピアの音楽職、文化について
吟遊詩人ラリベラ、楽師アズマリ、伝承歌

12:30～ 昼食タイム(喫茶さざなみハウス内)

- 13:35～ ハブさんのトーク
・自己紹介、丹田呼吸法 など

- 14:15～ ワークショップ 1
・好きな詩や言葉を紹介し合う

- 14:50～ ワークショップ 2
・みんなで輪になり、即興で音を合わせてみる

- 15:30頃～ トークセッション
・質問コーナー、本日の感想

終了・解散



参加者コメント

- ・ハンセン病に興味があり、開催場所も含めて参加してみたいと思いました。海外経験を持つお2人の話が楽しかったです。(50代/男性/会社員)
- ・どこか近寄りたがたい場所だと感じていましたが、会場に着いた時に海の景色が目飛び込んできて、すごく明るくて気持ちの良い空間だと思いました。今日は子どもも参加しましたが、一緒に楽しめて良かったです。(女性)

講師コメント

素晴らしい時間となり、心に風穴が空きました！そう感じられたのは、やっぱり謎多きハブさんの存在が大きいですね。皆さんが詩を読み上げている時のリアクションも良かったです。さまざまな行動に数値化、効率化が求められて余裕の無い世の中ですが、その逆のベクトルとして、とても豊かな時間だったと感じます。私の研究するテーマや音楽・文化体験についても皆さんが興味を持って聞いてくださり、多彩な質問や会話を繰り広げられました。音と言葉から生まれる自由さ、遊び心を堪能できました。(川瀬)

「散歩のような時間になれば」と思いトークを展開しましたが、振り返ると「壮大な旅に出たな」という感覚ですね。川瀬さんとお話させていただいた経験は、この1日だけでは咀嚼しきれず、いろいろな種をいただいたような思いです。参加者とのセッションでは音を出すことの難しさを感じましたし、皆さんが朗読してくれた詩や言葉はどれも素敵で、思わず沈黙するほど圧倒されました。また、この場所の良さも再確認できてうれしいです。もし次回があれば「エビデンスとアートの新たな関係」などをテーマにしてみたいと思います。(ハブ)

アートマネジメント研修

雑誌『地域創造』編集プロデューサー 坪池栄子のここだけの話!!

日時：2023年9月22日(金) 15:00～16:30

開催地：岡山県天神山文化プラザ 第2会議室

講師：坪池栄子(株式会社文化科学研究所/『地域創造レター』『雑誌 地域創造』編集プロデューサー)

1994年に設立された「財団法人 地域創造」(2014年に一般財団法人に移行)は、文化・芸術 振興による創造性豊かな地域づくりの支援を目的とした団体で、多彩なプログラムを通じて地域における文化・芸術活動を担う人材の育成や、公立文化施設の活性化を図る取り組みを行なっています。今回は地域創造が発行する『雑誌 地域創造』と『地域創造レター』の編集プロデューサー・坪池栄子さんを講師に迎え、豊富な現場取材の経験で得た文化芸術環境をつくる事例や裏話、公立文化施設の運営方法の知恵などをお話いただきました。本音で語る「ここだけの話」として、オンライン配信無しの貴重な講義となりました。

坪池栄子…株式会社文化科学研究所/『地域創造レター』『雑誌 地域創造』編集プロデューサー。1955年生まれ。1981年～1995年までびあ株式会社。情報誌びあの演劇記者を経て、文化科学研究所(旧・びあ総合研究所)編集プロデューサーを務める。地域創造が発行する『地域創造レター』『雑誌 地域創造』(1995年～)と、国際交流基金が運営する「Performing Arts Network Japan」(2004年～2023年)を立ち上げる。地域創造大賞(総務大臣賞)審査員ほか。



レポート

講師を務める坪池さんは、全国津々浦々の公共文化施設に自ら足を運び、文化芸術・地域づくりの様々な現場を取材し続けています。その経験をもとに語られた具体的な事例や付度なしの本音トークには、研修の参加者だけにに向けたオフレコ話も盛りだくさん。社会・経済・文化を取り巻く環境の変化を改めて意識し、文化施設における役割や取り組み方を見直すことの必要性を感じられる講義となりました。この報告書レポートではいくつかの固有な用語や具体的な情報は省略や言い換えするなどして、概要として共有できる部分をまとめています。

坪池さんが携わった、3つの重要な媒体

まずは自己紹介を兼ねて、今までの人生で携わってきた3つの重要な媒体を紹介しました。1つめは情報誌の『びあ』で、坪池さんは1981年から演劇記者として80年代の小劇場ブームや海外作品の日本公演など、演劇カルチャーの最前線を取材してきました。当時は『びあ』で記事が出たら3000人の観客が動くと言われるほどに首都圏のカルチャー・街遊びを牽引し、新たな都市文化のムーブメントを創り出す雑誌として定着。坪池さんもびあと共に多彩なエンターテインメントに心揺さぶられる青春時代を過ごし、編集者としてのノウハウや知識、感性を磨いたそうです。

2つめは、「財団法人 地域創造」が1996年に創刊した『雑誌 地域創造』です。外部の編集プロデューサーとして創刊から携わり、広報誌『地域創造レター』も制作。立ち上げの際には全国の文化施設関係者のリアルな声を取材したり、地域メディアの掲載情報を収集したりするなどの綿密なリサーチを重ねて企画を立てたそうです。毎号にわたって文化芸術を通じた地域づくりの現場レポートや新しい事例を紹介し、レターでは相談先となる担当者名を記載するなど、文化施設の運営をする人にとって本当に必要な情報に特化した紙面づくりの裏側を聞くことができました。現地取材した事例の数は、過去30年間で延べ800件ほど。坪池さんは実情や課題を振り返りながら、「地域創造の媒体に携わったことによって、初めて地域やコミュニティというものに客観的に出会うことができた」と話しました。

3つめは、創刊から19年間も編集制作に携わっている国際交流基金のウェブメディア「Performing Arts Network Japan」。坪池さんは日本の舞台芸術情報や海外では無名のアーティストを紹介する上で、注目度や検索率を高めるための切り口や仕掛けについて取り上げました。このウェブメディアでは、世界的な文脈を踏まえてアーティストを位置付け、ロングインタビューにより、作品だけではなく、創作活動の背景やルーツを伝え、中身の濃い情報を提供。海外の舞台芸術関係者に同じ土俵で興味を持ってもらえる視点を大事にした、と解説しました。



キーワード「環境は変化する」

次に、本題となるキーワード「環境は変化する」について話題を移し、地域・文化活動の現場で見られる流動的な組織体制や人材不足といった課題について触れました。公立文化施設においては、人事異動や社会情勢、期間が限られている指定管理者制度などの影響を受けて現場状況が大きく変わることも多く、中長期的な計画による「目に見えにくい成果」を求めるのは難しい、との見解。大切なのは、今の現場で実現できることを一歩ずつやって成果を積んでいくことであり、環境の変化に対する対応力や信頼関係をつくることも求められている、と語りました。

また、組織体制の変化においては「文化的原体験と自覚をもった人を広げること」も必要だと考えているそう。たとえポストを離れても、その人が地域のプレイヤーとなって別の形で経験を生かすことができれば、文化の担い手がどんどん増えていくというオルタナティブな広がり生まれます。経験と知識を持ったプレイヤーを増やして連携を図れば、地域の自力につながっていくと感じているようです。

厳しい現状と担い手の多様化、アートによるまちづくりの取り組み

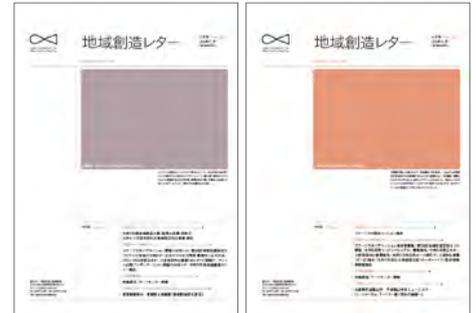
坪池さんは公立文化施設をとりまく環境の変化について、文化芸術事業の経費や人口・文化施設数の推移をグラフで説明。建設費・運営費の削減や人口減少など、地域創造が設立された30年前よりも厳しい現状に変わっていることを数字で示しました。また、2000年以降の文化芸術に係る法律の整備や都市の再開発ラッシュ、IT技術の進展といった出来事についても詳しく解説。施設・人・事業のすべてをアップデートすることが求められる時代において、地域の公立文化施設や財団も今までの枠組みから脱却して考え直すべきだと指摘しました。また、ハラスメント防止策が重視されている現状にも触れ、みんなが心理的な安全を担保できる環境づくりが求められている、と話しました。

環境が大きく変わっていく中で、アートによるまちづくりの取り組みが広がり、文化の担い手も多様化しています。自治体だけではなくNPO、指定管理者、学校、企業、市民など、すべてが担い手となって主体的に関わるようになりました。事業領域も拡大し、生涯学習、教育、福祉、防災、産業、医療、地域再生と、ありとあらゆる場面でアートが関わるまちづくりが検討され、その可能性もますます広がっています。

最後に、地域の实情に合わせた各地の参考事例をいくつか紹介。変化に対応するような果敢な取り組みは、日本各地で少しずつ始まっています。アートやまちづくりにおける問題意識も変わり、今は社会そのものを作っていく感覚がある、と坪池さん。自律型、協働型、多参加型、循環型の社会システムを構築していくことが求められており、既存の価値観からの逸脱を信条とする創造活動はそうした社会に向けた場づくり、人づくりのために大いに力を発揮できる可能性がある、とまとめました。



雑誌 地域創造 (vol.48,49)



地域創造レター (No.346,347)



国際交流基金ウェブメディア Performing Arts Network Japan

キーワード

雑誌 地域創造

「一般財団法人 地域創造」が年1～2回発行する雑誌。1996年に創刊し、公立文化施設、自治体などの職員、アートマネジメント関係者を対象とし、文化による地域づくりや芸術環境づくりのために役立つ情報を発信している。特集による事例紹介や座談会などの企画ページにより、国内外の取り組みを紹介している。

【バックナンバー】<https://www.jafra.or.jp/library/magazine/backnumber/>

地域創造レター

「一般財団法人 地域創造」の広報誌として、1995年度から毎月発行。財団からのお知らせ、各地の公立文化施設の催し物情報やレポート、制作実務がわかる読み物などを掲載。

【バックナンバー】<https://www.jafra.or.jp/library/letter/backnumber/2023/336/>

国際交流基金ウェブメディア Performing Arts Network Japan

国際交流基金が運営する舞台芸術のウェブメディア。2004年の創刊から2019年まで坪池さんが編集人を務め、日本の現代舞台芸術のアーティストと海外のプレゼンターのロングインタビューなどを日本語と英語の2言語で発信(2024年4月にリニューアル)。

<https://performingarts.jpf.go.jp/>



アートマネジメントオンライン研修 地域とアートプロジェクトの 心地よい関係性

日時：2024年3月27日(水) 15:00~16:30

開催地：オンライン配信

講師：芹沢高志(アートディレクター／アーツカウンシルさいたま アドバイザリーボード)

数多くのアートプロジェクトで総合ディレクターやプロデューサーを務めるほか、助成金審査も数多く手がける芹沢高志さんを講師に迎え、アートプロジェクトが地域にもたらすもの、プロ以外の人間が関わるマネジメントのコツ、市民活動型・参加型のプロジェクトなどについてお話しいただきました。少子高齢化、過疎、コミュニティの希薄化といった様々な社会課題を抱える地域にとって、アートプロジェクトの先に見据える未来や可能性とは？ 芹沢さんの豊富な経験や実践事例を通じて学びます。

芹沢高志…神戸大学理学部数学科、横浜国立大学工学部建築学科を卒業後、(株) リジナル・プランニング・チームで生態学的土地利用計画の研究に従事。89年に P3 art and environment を開設。帯広競馬場で開かれたとちか国際現代アート展『デメーテル』の総合ディレクター、別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』総合ディレクター、「さいたまトリエンナーレ 2016」ディレクターなどを歴任。さいたま国際芸術祭 2023 プロデューサー。



レポート

アーティストとの出会いが転機に

講義の最初は自己紹介を兼ねて、今までの経歴やアートとの出会いについて紹介がありました。もともとは都市・地域計画、環境、建築の分野で活動していた芹沢さんは、東長寺(東京・四谷)の新伽藍建設計画に参加したことがきっかけでアーティストと出会い、アートの世界に足を踏み入れました。「自分とは違うベクトルを持つアーティストとの取り組みは刺激的だった」と語り、アートの力を使って土地の持つ力を引き出すアプローチに可能性や面白さを感じたそうです。

その後は様々な芸術祭やアートプロジェクトに携わり、一つの空間や場所に留まらないスタイルで国際的に活動を展開していきます。主なアートプロジェクトの事例として、帯広競馬場に作品を点在させた「とちか国際現代アート展『デメーテル』」(2002年)や、キュレーターを務めた「横浜トリエンナーレ 2005」、2009年から3回にわたって総合ディレクターを務めた「別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』」、「さいたま国際芸術祭」(2023) などについてスライドの写真を交えながら紹介しました。

アート(問題発見型)とプロジェクト(問題解決型)について

続けて、本題の「地域とアートプロジェクトの心地良い関係性」についてトークを展開。芹沢さんは、アーティストとの協働を通して気づいた「問題発見型(アート)」と「問題解決型(プロジェクト)」の関係性について見解を述べました。アーティストは問題を発見し、新しい視点を提供していく存在ですが、一方でプロジェクトのマネジメント側は問題解決に向けて動くため、両者は真逆のベクトルを持っていると指摘しました。問題解決が重視されがちな現代社会において、問題を起こしていくアートの機能は重要であり価値があるもの。芹沢さんは、アートプロジェクトのより良い相互関係について、画家・エッセイヤーのリトグラフ作品「描く手」(二つの手がお互いの手を描いている)を関係性のイメージとして解説しました。芹沢さん自身は問題発見に力を入れた活動を続ける中で、「アートの中の幻(魔法)には、ビジョンを創り出していく強い力がある」と考えていることを語りました。



東長寺(1989年) 写真:萩原美寛



「横浜トリエンナーレ2005」アートサーカス会場風景
写真:細川浩伸



別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」
出展作品《Roshandel, 心の光》©Hossein Golba, 2009

地域とアートプロジェクトは変化し合う関係

次にアートプロジェクトと地域について、「お互いが変わり続ける関係性」であると言及。変化をいかに面白く捉え、変化を受け入れる姿勢を持てるかどうか、心地よい関わりをつくる上で重要だと述べました。そのためには、アーティストと地域の言葉を翻訳して双方に伝え、調整する役割の人が必要不可欠である、と考えています。

終盤では、参加者とディスカッションを図るために質問コーナーを設けました。その中で挙げた「ボランティアや一般の人たちが関わる場合のマネジメントのコツは？」という質問に対して、芹沢さんは「そこにもアーティストと市民の調整役となる存在が重要」だと回答。調整役はアーティストのタイプを見極め、適切な対応や仕組みをつくるのが求められます。一般市民の参入によって新しい視点やパワーを取り入れられることは、アートプロジェクトにおいて大きなメリットとなります。地域とアーティストがお互いに尊重し合いながらやりとりや働きかけができれば、アートプロジェクトに楽しい協働が生まれ、地域の姿も変わっていくのでは、と話しました。



「さいたまトリエンナーレ2016」
出展作品《Elemental Detection》©目[mé], 2016



Q&A とコメント

Q&A ※参加者からの質問を一部抜粋

Q 1. アートプロジェクトによって、地域やアーティストが変化した事例はありますか？

A. まず言っておきたいのは、変わるのは時間がかかるということ。過去のアートプロジェクトでは、回数を重ねる中で地域の変化を感じられました。しかし、1回実施すれば何かが劇的に変わるだろう、と最初から期待できるものではないことを考えておきたいですね。社会的に正解や問題解決を急ぐ風潮が強くと、アーティスト側も地域の要望への対応力や解決力に長けているケースがあります。しかし変化や結果を求めすぎると、アーティストの作家性が変質していき、相互関係が硬直して小ぶりなものになってしまいます。何年後には結果が出るという考え方ではなく、熱意を持った働きかけや関係性の持続こそが理解者を増やし、変化のためにやれることだと思います。続ける中で確実に変えられます。

Q 2. 問題解決型、問題発見型の役割をチームの中で生かすコツは？

A. 1人の人間の中にも解決型・発見型の両方の思考が存在し、そのバランスは状況により変化するものだと思います。どちらの傾向が強い人かを見極めた上でチームワークに生かし、違うベクトルが正面から衝突しないように「少しズラす」というイメージで調整を図るのが良いのではないのでしょうか。ズラすことでチームの動きを止めず、ぐるぐると回して形作っていくような関係性が生まれると面白く感じます。人手不足の課題もありますが、1人だけで問題を解決しようとせず、グループで共有・分散させることが大事です。

Q 3. 問題解決型・発見型の間を取り持つ人は必要だと感じますか？

A. それこそがプロジェクトの要だと思います。現場ではコーディネーターと呼ばれる方がその役割を担っているケースが多いですね。単に間を取りもつだけでなく、調整役として両方の役割をグラデーション的に体現してくれる人の存在意義を感じています。今までの経験上、そういった方の存在が居るが居ないかによって事の進み方がまったく違うと言えますね。

参加者コメント

すごく自分事として聞くことができ、大変参考になりました。豊富な経験・実績があるからこそその実感できるお話で、時間があっという間でした。実際の映像、写真もスライドで見せていただいたので、よりイメージが伝わりやすかったです。

講師コメント

文化芸術の情報や取り組みについては、地域の中でも意外と知らないケースは多々あると思うので、今回のように定期的に研修や各施設が集まる情報交換会を行うのは非常に良い機会だと思います。

研修のアーカイブはこちらからご覧になれます。
YouTube配信 OKAYAMA CULTURE V -おかやまカルチャー・ヴィー
<https://www.youtube.com/watch?v=K6o5QFcrhGI/>



おokayama県民文化祭 これがOKAYAMA! プログラム

県民が文化に親しみ交流するとともに、日頃の文化活動の成果を発表する場として、県内各地で様々なプログラムを開催しています。岡山県文化連盟は、運営主体として、おokayama県民文化祭の盛り上げを図っています。

主催事業のひとつとして、毎年地域(備前、備中、美作)とテーマを変えながら、象徴的事業「これがOKAYAMA! プログラム」を実施。本年度は「備前国 溶け合う異文化」と題して、備前地域の文化芸術資源を活用し展開する事業や新たな価値を発見し楽しみ方を提案する事業に取り組みました。

日時 | 2023年9月~11月

開催地 | 【岡山市】岡山県立美術館 / 岡山県天神山文化プラザ / 岡山市立 犬島自然の家 /

岡山理科大学 恐竜学博物館 / 蔭涼寺 / 韓国料理 佳牛味 COWMI

【瀬戸内市】喫茶さざなみハウス

【備前市】渚の交番 ひなせうみらボ / 地ビールレストランレマーニ

【オンライン】YouTube (OKAYAMA CULTURE V)

参加者数 | 691名 (YouTube視聴回数含む)

内容 | 特別ワークショップ(文化芸術交流実験室、アートマネジメントオンライン研修含む)

- ・やさしい日本語でアートを楽しむワークショップ「伝統工芸でつながるあなたと私の部屋」
- ・済州島の法事の料理を食べてみよう!
- ・岡山と中国茶文化の繋がりを知り、中国茶を味わう茶会
- ・LET'S みんなで♡いたいむ-Everybody Enjoy English-
- ・ゴビ砂漠恐竜発掘調査隊の『研究員』になってみませんか。
- ・文化芸術交流実験室vol.42 訪問実験室!⑥「プロによるプロのための指導とは。オペラの練習風景から」
- ・文化芸術交流実験室vol.43「美食地質学:この地域の食はなぜ美味しいのか」
- ・文化芸術交流実験室vol.44「溶け合う異文化:自然の一部として『個』を考える」
- ・文化芸術交流実験室vol.45「ことばのおと、おとのことば」
- ・アートマネジメント研修「雑誌『地域創造』編集プロデューサー坪池栄子のここだけの話!!」

その他



やさしい日本語でアートを楽しむワークショップ
「伝統工芸でつながるあなたと私の部屋」



済州島の法事の料理を食べてみよう!



岡山と中国茶文化の繋がりを知り、
中国茶を味わう茶会



LET'S みんなで♡いたいむ
-Everybody Enjoy English-



ゴビ砂漠恐竜発掘調査隊の
『研究員』になってみませんか。



広報物「備前国 溶け合う異文化」



(PDFデータ)

備前国 溶け合う異文化

私たちは暮らしている中で、なぜ此処に異国の人がやってきたのだろう…と、不思議に思う場所や事柄に出会うことがあります。

異国の人が伝えた、これまで見たことがなかった文化や技術が、とても自然に地域に根付き、今では、なくてはならないものとして馴染んでいたりします。地球規模で見ると、文化はどこか地続きで、微妙なグラデーションで緩やかにつながっているようですが、やはり遠く離れた国からやってくるものには、互いを出会わせる何らかの理由があるはずで、県内を見回すと、備前というエリアにはそういった、日本の文化と溶け合って存在する異文化があちこちに見つかります。

昨今では、軽々と国境を超えてやって来て、日本の伝統的な技術や文化を、自分たちの暮らしや仕事の軸足にしている若い人々も沢山います。そんな彼らから、私たちは日本の伝統的な文化芸術の良さに改めて気づかせてもらうことも増えてきたように思います。彼らはなぜ、ここ岡山を選んだのでしょうか。

中国山地では長きにわたり砂鉄の採取や、たたら製鉄のための木材の伐採が続いたため、大量の土砂が川に流され下流に堆積しました。1500年後半にはその土砂の堆積で児島半島と本土の間にある「吉備の穴海」に干潟が形成されました。オランダはライデン生まれのアントニー・トーマス・ルベルタス・ローウェンホルスト・ムルデルは、デルフト工科大学を卒業後、ハーグ市で土木の設計技師として働いていましたが、31歳の時に日本の内務省の土木技師として来日します。2年後の1881年には、岡山で綿密な調査を行い「児島湾干拓計画図」を作成しました。彼は調査の中で、山々の樹木の伐採を続けることによって土砂の流出が止まらず、洪水を引き起こすことを憂慮し、伐採の禁止や川の上流における砂防の必要性なども提言しています。異国からやって来た30代の若者が果たした役割はとてつもなく大きく、すでに140年も前に、彼は環境保護や治水の方向性を示していたと言えます。

臨済宗妙心寺派の禅寺、曹源寺は、岡山藩池田家の菩提寺ですが、ここには世界各地から修行者がやって来ます。

20人あまりの修行者のほとんどが外国の人であるお寺は、日本国内でもとても珍しいのではないのでしょうか。ここでは美術作品の展示も行われることがありますので、それをご覧になり訪れた方も多いでしょ。

そして、日生には BIZEN中南米美術館があります。魚網を製造し海外にも広く販売していた森下グループの初代社長森下精一氏がコレクションしたインカ文明やマヤ文明の土器や土偶、布などが展示しており、国内外より研究者が訪れる貴重な場となっています。

また、よく知られているものに、牛窓の朝鮮通信使があります。1600～1800年代に、出発地点の朝鮮の漢陽(現在のソウル)よりやって来た使節団一行は、時に数百人におよびました。様々な技芸に秀でた者も多く含まれていたといえます。県の重要無形民俗文化財である唐子踊は、この一行の中で人々のお世話をしながら旅の慰めとして歌や踊りを披露した、才能あふれる子どもたちの服装や踊りに影響を受けたのだと言われています。

今年のおかやま県民文化祭「これが OKAYAMA! プログラム」では、備前国～溶け合う異文化～をテーマに取り上げます。

穏やかな内海の航路と良港の存在、豊かな自然、山から海へと注ぐ水量豊かな川、古くから人の往来が多かったこと、暮らしやすい気候などが、備前国へと人々を惹きつけて来たのかもしれませんが、さらに、これをきっかけに、身近に暮らす異国からの人々の話に耳を傾け、一緒に何かをしてみるのも良いのではないのでしょうか?彼らを誘ったものは一体何なのか…。溶け合う異文化という視点で地域をあらためて見つめ直すと、これまで気づかなかった備前というエリアの持つ地域性や、文化の特性、魅力などが、じわりと浮かび上がってきそうです。ここで取り上げるのは、異文化とつながりの深いヒト・場所・コトです。どうぞ、この冊子を手掛かりに各地を訪ねてみてください。(大月ヒロ子)

県内の文化芸術資源を発掘、再評価、活用するための調査研究。



瀬戸内国際芸術祭たまの☆おもてなし推進委員会 たまのスチューデントガイドチーム

たまのスチューデントガイドプログラムは、「宇野港を教育フィールドに!」というテーマのもと、2017年より活動を開始。玉野市に関わる学生が、観光ボランティアガイド「つつじの会」や瀬戸芸サポーター「こえび隊」などの団体と連携し、地域の魅力に触れ、観光客に対するおもてなし活動を行っている。

[住所] 〒706-8510 岡山県玉野市宇野 1-27-1

[電話] 0863-32-5577



The World Kitchen 実行委員会

岡山大学グローバルディスカバリープログラム（GDP）の有志の学生が、普段から様々なバックグラウンドを持った学生と交流している自分たちだからこそ、まちの中で多文化交流のきっかけが作れるのではないかと考え、2022年7月に実行委員会を設立。岡山のまちづくりに関わる社会人のサポートも受け、DP1・2 回生 21名で活動中。

[住所] 〒700-0812 岡山県岡山市北区出石町

[電話] 070-4496-2049



岡山県立邑久高等学校 美術部

瀬戸内市唯一の高等学校。1学年普通科1クラス、生活ビジネス科2クラスで構成されており、普通科には文系・理系の他に、美術を多く学ぶ「美術重視モデル」が専攻できる。将来美術やデザインの分野で活躍したいと考えている生徒たちに対して、授業や部活動、地域と連動した創作活動など、様々な学びの場を用意している。

[住所] 〒700-4221 岡山県瀬戸内市邑久町尾張 404

[電話] 0869-22-0017



岡崎嘉平太記念館

岡山県・大和村（現吉備中央町）出身であり、生涯にわたって日中友好に尽くし、全日空の社長等財界人としても活躍した岡崎嘉平太（1897-1989）の功績と人柄を顕彰する記念館。常設展示室では岡崎氏の生涯と功績を紹介し、ビデオコーナーも設置している。また年に数回企画展や講演会等を開催。

[住所] 〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川 4860-6 きびプラザ 1階

[電話] 0866-56-9033



范曾《竹林七賢図》
(公財) 両備文化振興財団所蔵

范曾美術館

1984年（昭和59年）開館。世界的に評価されている中国画の鬼才 范曾（はんそう）の最盛期の作品、特に大作を多く所蔵し、世界一のコレクションを誇る美術館。公益財団法人両備文化振興財団が運営する。コレクションのきっかけは故松田基（もとい）初代館長が岡山市内の中華料理店で范曾の「八仙図」に出会い、その詩情溢れる豪放な筆致に感銘を受けたことに始まる。岡崎嘉平太は范曾を「中国の歴史に残る画家である」と称し、美術館設立に際しても尽力し名誉館長を務めた。

[住所] 〒704-8112 岡山県岡山市東区西大寺上1丁目 両備バス「西大寺バスセンター」2階

[電話] 086-271-1000 (公財) 両備文化振興財団 夢二郷土美術館 本館

現在は、毎年2月第三土曜日の西大寺観音院会場の行事にあわせて、3日間のみ特別開館



子ども図書館ほたる

未来をつくる子どもたち。その子どもたちに、想像力と創造力を育てたい。デジタルで何でも知ることができる時代だからこそ、めくるページの中で出会う世界を大切にしたい。今まで見たことのない、これから見たい世界に出会って欲しい。そんな想いから「子ども図書館ほたる」をつくりました。(WEBページより抜粋)

[住所] 〒709-0825 赤磐市馬屋 1434-7

[MAIL] john@axcis-inc.com



八塔寺国際交流ヴィラ / 岡山国際交流ヴィラ

1980年代後半から1990年代初頭にかけて県が外国人観光客等が気軽に宿泊できるとともに、外国人と地域住民がヴィラを拠点に交流し国際理解と親善を深めること、また外国人に地域の固有の生活文化・伝統等を体験してもらうことを目的として設置した宿泊・滞在施設。現在、備前市吉永町の「八塔寺ヴィラ」と笠岡市白石島の「白石島ヴィラ」の2軒が利用できる。

[住所] 〒709-0301 岡山県備前市吉永町加賀美 1193

[電話] 0869-84-2511 (備前市役所吉永総合支所)



特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構 (アムダマインズ)

人づくり村づくりを通じ、世界の貧困地域において暮らしの改善に取り組んでいる認定 NPO 法人。現在 9 か国で、保健、農業、教育、生計向上など SDGs 達成に向けた社会開発プロジェクトに携わっている他、日本国内では、国際理解教育や企業連携を通じた社会教育を推進している。2007 年設立。AMDA グループ構成団体。

[住所] 〒700-0818 岡山県岡山市北区蕃山町 4-5 岡山繊維会館 3 階

[電話] 086-232-8815



公益財団法人 橋本財団

岡山県における社会福祉の増進を目的とした公益法人。福祉活動や調査研究への助成金交付事業、WEB マガジン・イベント等での情報発信事業、ソニエタス総合研究所の調査研究事業を通じて、共生社会の実現を目指しています。

[住所] 〒700-0903 岡山県岡山市北区幸町 8-20 アクアテラス幸町 10F

[電話] 086-201-7157



INE (居場所作りネットワーク)

設立は 2021 年 8 月 3 日。学校法人アジアの風 岡山外語学院・BIO (ビジネス・インキュベーター岡山)・グループ Yuu の 3 団体が、それぞれの強みを持ち寄り設立。日本語教育、人材育成・起業支援、多文化共生社会の構築などそれぞれの専門分野についての専門家により在留外国人の課題解決と支援を目的としている。

[住所] 〒700-0841 岡山県岡山市北区舟橋町 2-10

[電話] 086-254-0833



岡山市立オリент美術館とアラビック・コーヒー

1979 年に開館し、岡山の実業家・安原真二郎氏や岡崎林平氏らの旧蔵品を核とする約 4,700 点の美術考古資料を収蔵する、東アジア唯一の公立オリент専門美術館。市民の寄付により取得した当館を代表する作品アッシリア・レリーフ「有翼鷲頭精霊像浮彫」は、古代アッシリア帝国の宮殿壁面彫刻で、古代オリент美術の一つの到達点とされる世界的な文化遺産。

建築は最高裁判所を設計した著名な建築家・岡田新一氏によるもので、中近東のエッセンスをちりばめた素晴らしい建築空間に多くの来館者が魅了されている。2022 年 4 月の大規模改修を経て再開館し、オリент文化を親しみ易く紹介している。

エジプトや西アジアでコーヒーといえば、アラビック・コーヒー。極細挽きのコーヒーにカルダモンを調合した粉を、イブリークと呼ばれる手鍋に入れ、水を注ぎ砂糖を加えながら煮立てる。カップに粉ごと注ぎ、粉が底に沈んだ頃、独特の甘い香りとともにコーヒーの上澄みをそっと啜れば、濃厚でありながら爽やかな後味。アラビック・コーヒーは、美術館内にある喫茶室イブリークで飲むことができる。

[住所] 〒700-0814 岡山県岡山市北区天神町 9-31

[電話] 086-232-3636



公式YouTube OKAYAMA CULTURE V

岡山県文化連盟では、YouTube公式チャンネル「OKAYAMA CULTURE V-おかやまカルチャー・ヴィ-」をオープンしました。「楽しいが見える!」をコンセプトに、当連盟で作成する様々な動画コンテンツや、実演家の皆さんが自ずから撮影した動画を配信する場として広く公開し、県内の様々な文化芸術活動の様子を伝えていきます。

開始時期 | 2020年

2023年度作成・公開数 | 4本



URL <https://o-bunren.jp/tv/>

訪問実験室



文化芸術が生まれてくる現場⑥「プロによるプロのための指導とは。オペラの練習風景から」

ルネスホールの企画事業であるオペラアカデミー「アルテ・シェニカ」にスポットライトを当て、岡山県内の豊かなオペラ環境を目指す「オペラ研究所」の制作現場を訪問しました。2023年7月8日・9日に開催された第五期修了公演に向けた稽古場での練習風景や本公演の様子、そして関係者のインタビューを交えてお届けします。

Profile | ルネスアカデミー「アルテ・シェニカ」

ルネスホール(NPO法人バンクオブアーツ岡山)の企画事業として2017年にスタート。岡山におけるオペラの人材育成を目的とし、県内外からオペラ歌手としての舞台経験を持つ研修生を募集。講師の指導のもとで譜面読みや歌稽古(発声・発音)、指揮者練習、演出稽古を行い、年1回の修了公演に向けて作品を創り上げる。2023年7月現在、10数名が研修生として参加している。



文化芸術が生まれてくる現場⑦「支え合う地域の文化～箏づくりの現場から」

岡山県文化連盟では、公立小中学校の児童生徒を対象にした「学校出前講座」を実施していますが、箏曲講座で使う和楽器の貸出しや運搬、メンテナンスは、岡山県内の和楽器店のサポートにより実現しています。今回は講座に協力いただいている和楽器店の中から、元禄年間創業の老舗「関屋琴三絃店」を訪問し、実際に箏を作る様子を見学させていただきました。

Profile | 関屋琴三絃店 琴三絃司 石村勝治

元禄年間創業。手作りの琴や三味線の製造・販売、貸し出し、修理を行い、分業制ではなく全ての工程を1人の職人が手掛けている。現当主の石村勝治さんは十三代目。原木の買い付けを含む全工程を体得した琴匠として、和楽器の伝統文化を次世代に継承している。

アートマネジメントオンライン研修



地域とアートプロジェクトの心地よい関係性

数多くのアートプロジェクトで総合ディレクターやプロデューサーを務めるほか、助成金審査も数多く手がける芹沢高志さんを講師に迎えました。芹沢さんご自身の豊富な経験や実践事例から、様々な社会課題を抱える地域が、アートプロジェクトの先に見据える未来と可能性について学びました。

Profile | 芹沢高志

神戸大学理学部数学科、横浜国立大学工学部建築学科を卒業後、(株)リジонаル・プランニング・チームで生態学的土地利用計画の研究に従事。89年にP3 art and environmentを開設。帯広競馬場で開かれたとかち国際現代アート展『デメーテル』の総合ディレクター(2002年)、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』総合ディレクター(2009年、2012年、2015年)、「さいたまトリエンナーレ2016」ディレクターなどを歴任。さいたま国際芸術祭2023プロデューサー。

マイニングおかやま

岡山県を拠点に活動するアーティストを地域の貴重な文化資源として可視化し、アーティスト活動の活性化に繋げていただくためのプラットフォーム。類まれな輝きを放つ宝石やこれから輝く原石を採掘するような感覚で岡山県の文化芸術に関する人・コト・場所を紹介し化学反応を起こしていくサイトを公開。「文化芸術マイニングリレー」「クリエイション再遊記」「文化・芸術・芸事名鑑」の3つのコンテンツを運営しています。

開始時期 | 2022年2月

内容 | ・文化芸術マイニングリレー:好きからはじまるリレー形式のインタビュー記事

登録数 | 8

・クリエイション再遊記:岡山県天神山プラザ企画展「天プラ・セレクション」等の活動記録や作家情報

登録数 | 100

・文化・芸術・芸事名鑑:岡山県で活動する表現者の登録型データベース

登録数 | 309

・マイニングおかやま 活用実践モデル事業:「マイニングおかやま」の活用促進を目的として、おかやま文化芸術活動相談窓口に寄せられた相談の中から、公益性が高く文化芸術の社会的価値を具現化するに相応しい事業をモデル事業として採択し助成。事業実施後はモデル事例としてWEB公開しています。

採択件数 | 2

-中学校芸術鑑賞会における招聘劇団選定のためのコーディネーター紹介

-小学校の創立150周年記念事業の展示計画および展示指導アーティストのマッチング



URL | <https://www.mining.bunren.jp/>

おかやま文化芸術活動相談窓口

文化芸術活動を行っている個人、団体を対象とした専門の相談窓口を設置。文化芸術活動への取り組み内容や思いなどをしっかり聴き、寄り添いながら、段階に応じたサポートや情報提供などを行いました。

相談・サポート内容 |

- ・練習場所の提供、紹介
- ・指導者やアーティストの紹介、マッチング
- ・事業相談や計画策定
- ・集客計画やチラシ配布で広報サポート
- ・県内外から集めた各種情報の提供
- ・活動に関するお悩み相談
- ・補助金・助成金の活用 etc.

受付件数 | 74 件

NPO活動 資金調達基礎講座 助成金説明会&相談会

日時 | 2024年1月16日(火) 13:30~16:00

会場 | 岡山県ボランティア・NPO活動センター研修室

受付件数 | 4件



監修	金 孝妍
編集	高田佳奈、橋本 誠、溝口仁美
デザイン・制作	安藤次朗 [LOVE AND PEACE]、加藤 咲
発行	公益社団法人岡山県文化連盟 〒700-0814 岡山市北区天神町8-54 岡山県天神山文化プラザ内
TEL	086-234-2626
FAX	086-234-8300
URL	https://o-bunren.jp/